

## 〔一般の部・最優秀賞〕

### 小説

#### 小瓶

静かな作品である。特別なことは何も起こらず、少女から若い女性になつていく彼女の内面の世界が、二つの小瓶の思い出の中に落ち着いた文体で書かれている。

一つの小瓶はケーキ屋でアルバイトしていた時に、父親の年齢のような無口の男性から貰つたジャムの小瓶。それは彼女にとつて特別なものになるが、その小さな体験を通して少女時代のジャムの思い出が語られる。

もう一つの小瓶は、離婚した母親とドライブした時にお店で見つけた空の小瓶。少女は近くの海岸で砂を入れよう

と思うが、自分にとつてもつと大切なものを見つけて入れるために、空の小瓶をずっと持つているようになる。

両親の離婚は少女にとつては大事件のはずだが、消えるようにいなくなつた父、そして働き始めて疲れた母の顔だけを描き、静かに受け入れようとする。その悲しみは小瓶の中に詰め込まれた印象を持つた。

## 〔一般の部・小説〕

### 【優秀】

#### Forty-Nine

最優秀を最後まで競つた作品。夫の犯罪で田舎の家で暮せなくなつた女と、かつての同級生で恋人未満の付き合いをしていった男が偶然出会う。男も帰る予定が無くなつた故郷の家を売つて帰る途中、同じように関東に向かうので、男の車に乗せてもらう。停まつた車に接触する軽い事故があつたり、小さな出来事を通じて人間関係の襞が見え隠れする。

女にとつては傷ついての再出発であり、それを知つていてる男の気遣いも落ちついた中年の味が出ていてペンの巧みさを感じさせる。ただ予測通りの展開であり、ミスのない巧みさが、もう一つ何かがほしいと思わせた。

応募作品中小説作りが最も優れた作品であり評価も高かつたのだが、きちんとまとまり過ぎていたのかもしれない。難しいが小説にはどこかが破れた魅力も必要なのだろう。

## 【優良】

スピカ

介護の現場で出会う高齢者との心のつながりと、30才の女性の屈折した恋愛を描いた作品である。本好きな老女と「婉という女」の話をしたりして親しくなり、薫は婉の幽閑の地を訪ねたりするが、しかしその女性は亡くなる。一方、彼女は民生という男と高校時代から付き合っているが、彼はフリーターでぶらぶら、腐れ縁のような関係が続いている。そして夜勤明けで民生に会いに行くと、部屋から女が出て来るのを見てしまう。別れる？ と訊くと、民生は「どうでも」と言う。二人の関係を象徴する言葉、薫は別れる決意をする。

介護の世界での出会いと別れの繰り返し、そして男と女の別れの中に、寂しさを抱え込んだ人間の姿が描かれているが、やや複雑な構成にしてしまったため、読む側は少し戸惑う。もう少し枚数が必要な作品かも知れない。

## 【佳作】

海に戻ったマーメイド

高校生の恋愛、爽やかな青春の物語である。大学受験のため、茉里奈は大好きなサーフィンを止めて勉強しているが成績は上がらない。止めたのに少し時間があると海にサーフィンを見に行つたりしてしまう。そこでは先輩の海斗がサーフィンしている。きちんと目的を持つて勉強もしている海斗が羨ましいし、悔しい。そんな落ち込んでいる茉里奈に海斗はもう一度やろうと勧める。

受験とサーフィンと先輩の彼、青春の恋愛の三点セットは爽やかだが、それ以上の深みが無いのが惜しい。青春は秋晴ればかりではないし、苦しみや屈折した思いも潜んでいる。

作品の中にもう少し異なる視点が入ついたらと思いながら読ませて貰った。

## 【佳作】

あさり世界

草食男子という言葉も死後になりつつあるのかもしれないが、この作品を読みながら若い夫婦も大変だなと思われた。料理好きの夫に、今夜は何食べたいと訊かれるのが私は大変苦痛で、離婚まで考えてしまう。私は料理や味にあまり頼着しないからだが、元気がない私に夫は、友達と時々行く「椿屋」に行くように勧めてくれたり、迎えに来てくれたりする。以前、若い人から夫の優しさが苦痛だと言う話を聞いて驚いてしまったことがあるが、この作品の夫も本当に優しい。そしてその優しさが苦痛だと言うのだから世の中は難しい。

また作者はおそらく意図的に、読者の理解を困難にするような独特の比喩や表現をしているが、混乱の中に巻き込まれるような印象が強い。だが何かを考えさせられてしまふ作品である。

## 〔一般の部・隨筆〕

### 【優秀】

親父

認知症をテーマにした作品は毎年応募がある。それだけ身近な問題なのだろうが、この作品には厳しい現実に振り回される家族の激しい葛藤が迫つてくる力に圧倒される。祖父が認知症になり早期退職して介護に専念した父親は、祖父に殺すぞと怒鳴られる。覚悟を決めた介護だったのに、無念にも施設に入つて貰うしかなかつた。だがその父親が同じように認知症になり僕の顔も忘れ、殺すぞと喚く。家族全員が追い詰められて母は自殺未遂をする。心がバラバラに千切れしていく中で、でもどこかで繋がつているかもしれない家族とはと、作品は深い問いを発している。ラストシーン、息子の顔も忘れた父親との会話の中の深い悲しみに、切れた親子の人間としての微かなつながりを感じて少し心が救われる。

## 【優良】

### 高萩の風に吹かれて

祖母の人生を描いた作品。十四歳で親が決めた五十男との結婚。その状況を作者は「明治時代の社会通念だったとはいえ、老木と開花前の硬い薺の新所帯」と表現している。祖母は逃げ帰り、十二年後高知から流れ来た祖父と結婚、満州に行つたりするが戦後高知で暮らすようになる。しかし夫は早逝、祖母は高知で頑張るが嫁にも厳しく、決してやさしいおばあちゃんではなかつた。

作者は亡くなつた友人の葬儀で東京に行き、ふと思いついて常磐線に乗つて祖母の育つた高萩に行く。そこには祖母の実家があつたが誰もいなかつた。

祖母の人生を語つてゐるが、その底に時代の流れを見詰めているので単なる思い出話には終わつていない。また静かな語りが落ちついた作品にしている。

## 【佳作】

### 南の村の雪

朝起きると突然の雪、出先で同僚と待ち合わせしていたので慌ててバイクに乗るがなかなかエンジンがかからない。やつと動き出すが渋滞で路肩のバイクは極めて危ない。近くの駅に停め、タクシーに乗るが遅刻してしまう。平謝り。やつと帰宅して外の雪景色を見ていて、子供の頃の雪の日を思い出す。

寒がりの私は雪は家から眺めていたらよかつたのに、妹に連れ出され丘の上で雪合戦。その場面がリアルに描かれている。

中年（思秋期）になつた私は、「子供の頃や青春を振り返るとき、「南国の空」に舞う雪は、希少さや儂さ、失われてゆく幻想、あらゆる象徴に成り得た」と語る。寒がりの作者は嫌いなのに、雪の思い出の中にどこかで人生を重ねている。

【佳作】

虎図

誰も見たことが無かつた猛獸の虎は、龍とともに江戸時代の動物画材の代表である。作者と夫は「虎図」が好きだが、その夫はドクターへりで救急搬送された病室で、虎の幻視を見てしまう。話を聞かされる作者は暗澹たる気持ちになるが、幸いにも病気は回復し、「あの虎が守ってくれたんや」と夫は守護虎のように崇める。そして一年後に和歌山の「無量寺」に二人で襖絵の「虎図」を見に行く。

作品の中では金毘羅宮の丸山応挙の「游虎図」や河田小龍の虎図など全国にある虎図についての感想が述べられて いるが、そんな風に「虎図」を見に行く人がいると思うと、何故か嬉しい気持ちになる。また「虎図」への思いと夫への思いが微妙に重なつていて、読後のいい作品である。